

この度、補助犬の一つであり最も歴史と実績のある盲導犬が、実働中に何ものかに刃物で傷付けられた という事件があったことについて、関係者として強い憤りを持っております。1ヶ月近く経ってから、初めて事件として取り上げられ、ニュースになるような現状にも、改善を求めたいと考えます。一日も早く犯人を検挙し、今後はすぐに目撃情報を得るなどの捜査を開始出来る体制に改善して頂きたいと思っております。

犯人の検挙なくして、補助犬とともに生活する方々のみならず、障がい者も、私達一般市民も 安心して社会に出ることが出来ません。

社会の安全は、社会で一人一人がお互い支え合って初めて成り立ちます。そのような意味で、視覚障がい者や障がい者が犯罪の被害者になる傾向があってはなりません。社会全体で、そのようなことがないように、いつでも手を差し伸べられるような社会啓発が必要であることも、今回の事件を通して浮き彫りになりました。

また、この事件の報道を通して、あらぬことか、「刺されて痛くとも啼かない訓練をされている」などという間違った報道、それを受けて「そのような訓練をする盲導犬はかわいそう」「ただでさえ寿命が短いのに」といった言葉を聞く機会が増えていることは、放置出来ません。

「盲導犬の寿命が短い」という言葉には、学術的根拠はありません。一方、「寿命が長い」という調査報告は、当学会の学術誌に掲載されています。<http://www.jssdr.net>

2007年日本補助犬科学研究 Vol.1 事例報告「盲導犬の平均死亡年齢について」

日本獣医生命科学大学 水越美奈

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssdr/1/1/1_1_60/_pdf

補助犬使用者は、パートナーであり、身体の一部と同じ存在である補助犬を、大切にし、大切に想っています。補助をしてもらっただけではなく、犬の飼育管理には、責任を持ち、お互いに支え合って生活をしておられます。

障がいを持ち、社会参加の大きな壁を、補助犬とともに乗り越えたユーザーさん方が、一日も早く 安心して社会に出られる日々に戻ること、補助犬は可哀想 などという誤解が払拭されるよう、当学会としても、正しい情報発信をし続けて行きたいと考えています。

皆様のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

日本身体障害者補助犬学会 理事長 秋田 裕